

英語における分裂文の発達

山 川 喜 久 男

I 現代英語の分裂文

ここに分裂文 (Cleft sentence) というのは, "It is... that (who, or which) (関係代名詞) ~" または "It is... that (接続詞) ~" の構造をなし, it is のつぎに置かれる要素が意味上で卓立し, 強調されている文のことである。まず, 現代英語からの具体例をあげよう。

(1) *It's really his wife that's keeping them apart.*
—F. S. Fitzgerald, *The Great Gatsby* II. (美のところで, あの二人を離ればなれにさせているのは彼の妻さん

なのです。)

(2) *Indeed, it turns out that it is the future, and not the mere ignorance of each other's professional concerns, that makes the separation between the culture of science and the culture of literature.* —L. Trilling, *An Interpretation of "The Two Cultures"* II. (実に, 科学の文化と文学の文化とを分離せしめるのが未来なのであって, 単なる相互の専門的関心事に対する無知なのではないということになる。)

(3) *It is not a finished Utopia that we ought to*

desire, but a world where imagination and hope are alive and active. —B. Russell, *Political Ideas* I. (われわれが求めるべきなのは、完成した理想郷ではなく、想像と希望が息つき発射とした世界である。)

(4) *It is children who know...that they don't write well...who are apt to give us only a grudging and limited performance when asked, ...—H. Fraser, The Teaching of Writing.* (言われたときでもしどしどと限られた程度にしかよく書けそうもない子供というのは、よく書けないことを知っている子供のことである。)

(5) *for it is not you who will be speaking: it will be the Spirit of your Father speaking in you. —N. E. B⁽¹⁾, Math. x. 20.* (語っているのはあなたがたではなく、あなたがたの中において語っている父の霊だからである。)

(6) *It is the purchaser, not the mere feeder and fondler, to whom ultimate loyalty is due. —E. Waugh, On Guard.* (最後まで忠誠を尽くさなければならぬ相手は自分を買ってくれた人であり、単に餌をくれ、可愛がってくれているだけの人ではない。)

(2) 中世 聖書 聖書 聖書

(7) *I don't know how he had come to know the Driffields, and whether it was esteem for the author that brought him to the house, but it was certainly not that which caused him to come again. —S. Maugham, Cakes and Ale xvii.* (どうして彼がドリフフィールド家の人たちを知るようになったのか、その家を訪れるようになったのは作家に対する敬意からのことなのかは、私にわからないが、彼が再び訪ねたのがそういうことからではないことは確かだった。)

(8) *It was not thus that he wrote the poems which brought him fame and his present peculiar fortune. —E. Waugh, The Loved One.* (彼が名声と今日の独得な幸運を獲得するもとなつた詩を書いたのはこのようにしてではなかった。)

(9) *It was to make this possible that reference was made to actual material. —W. R. O'Donnell, The Teaching of Grammar.* (実際の資料に言及したのはこのことを可能にするためであった。)

(10) *It was not until he recognized his friend in the crayon portrait of a little boy in kilts and curls,*

hanging above the piano, that he felt willing to let any of these people approach the coffin. — W. Cather, *The Sculptor's Funeral*. (彼がこの人たちにひつぎのそばに寄って来させてもよいと思うようになったのは、ピアノの上に掛かっている、キルト服を着た巻き毛の少年のクレオン画が自分の友を描いた絵だと気づいてからのことだった。)

以上は20世紀の英米の作家・評論家あるいは教育者からの引用であるが、統語形式の各種にわたって配列した、現代英語に見られる分裂文の代表例である。これに見られるように、分裂文を、(1)から(7)までのように、It is (or was) のつぎに表わされるものが名詞(語群)や代名詞であり、それに続く従節が関係代名詞に導かれているものと、(8)(9)(10)のように、It is (or was) のつぎに表わされるものが副詞・副詞句または副詞節であり、それに続く従節が接続詞の that に導かれているものという2種の型に分けてみることができ。この2型は、以下に観察する歴史的発達の様相に関連させてみても、それぞれ異なった二つの系列につながるものである。もち論、両者に共通する特質はあるが、一応、前者

を名詞語句強調型、後者を副詞語句強調型と名づけることとする。

まず、名詞語句強調型の構造上の特徴を考えてみよう。この型では、that, who, which などの関係代名詞に対する先行詞が構文全体の意味関係から言えば、主節の形式上の主語として用いられている it であると考えられる。たとえば、(1)の意味を分裂文でない表現形式で言い換えてみれば、(1a) The person who is keeping them apart is really his wife. となる。それにもかかわらず、(1)の関係代名詞 that の先行詞は It is の叙述語(Predicative)の his wife であり、関係詞節内の定形動詞の is (keeping) は文法的に It と一致しているのではなく、his wife と一致している。この点が形態上に顕示されているのが、(4)の It is children... who are apt to... であり、ここでは who が先行詞を children とする複数形の関係代名詞として用いられていることが、統く are によって形態的に顕現化されている。このように、名詞語句強調型における関係代名詞の先行詞は、構文全体の意味関係と即応せず、強調されている名詞語句であるといわなければならない。

(4) 句切れ 句切れ 句切れ

つぎに注目すべきなのは、(1a) のような、普通の制限的用法の関係代名詞の場合とは異なって、分裂文における関係代名詞とその先行詞との間には音調上の切断が認められる点である。つまり、"It is (or was) + 名詞語句" が、続く関係詞節と明らかに切断されて、一つの音調単位 (Tone unit) を構成している。そのような音調単位の末尾が文強勢 (Sentence stress) を帯びた語が占めるのに最もふさわしい位置なのである。実に、分裂文は、強調される要素を一つの音調単位の末尾にすえて、強調の目的を十分に達成しようように調整された構文である。

ここで考察を意味の面に向けなければならない。ふたたび (1) によっていえば、この文は、主語の his wife を強調した (1b) His wife is keeping them away. という単文構造に対応した複文構造である。(1b) では、話者がこの特定の場 (Situation) において伝達しようとしている情報の焦点が his wife にある。一般に、心理的には、文を構成する主語と述語のうち、情報の焦点は述語に置かれるのが普通であるが、(1b) はそういう普通の場合と違って、情報の焦点が主語に置かれている。

つまり、(1b) における his wife は文法的には主語ではあるが、心理的には述語であるといえる。従って、(1) の It is his wife that is keeping them away. とは、(1b) における心理上の述語を文法上の述語の位置に表現し、(1b) の含む意味上の実質を構造形式の上に顕現化したものということになる。このように、意味上の強調が統語構造上の強調に調整されていることがこの構文の特徴であり、それが強調されるべき要素を文構造中の基本的位相から分裂させることによって実現されている。いわば、この構文の本質的特徴の契機が分裂にあるといえるのであり、「分裂文」という名称は妙を得て適切なものである(2)。上の例(4)において、強調されている children に、それを直接に限定する who の導く関係詞節が続き、さらに、そのあとに It と呼応する who の導く関係詞節がゆるやかに配置されており、相連なる二つの *who*-clauses のうち、前者の前には小さく、後者の前には大きい休止の存在を対照的際立たせている点が注目される。

つぎに、副詞語句強調型について述べよう。たとえば、上の例(9)は、目的を示す副詞的な不定詞句 to make

this possible を強調している単文構造 (9 a) We made reference to actual material to make this possible. における心理的述語というべき to make this possible を文法的述語として顕現化した複文構造であるといえる。

ただ、この型では、従節を導く that は主節の形式的主語の it と相関的関係をなしている従位接続詞とみなさざるをえない。従って、it は、(9b) It is true that reference was made to actual material. におけるような、あとの that-clause をあらかじめさす先行の it (Anticipatory it) と外形上類似している。実際には、

(9) It was to make this possible that reference was made to actual material. における possible のあとには、(9b) における true のあとにくらべ、より大きな休止があり、(9) と (9b) とは異質的構文であることは言うまでもない。しかしまた、両者の間に外形上の類似性の認められることも事実であり、その点こそ副詞語句強調型分裂文の歴史的発達の一要因をなしており、それがまた、この構文の統語的特異性をもたらす源点ともなっている。

以上のように、名詞語句強調型にせよ、副詞語句強調

型にせよ、分裂文とは、心理的には、単文構造を分裂させて複文化したといえる表現様式である。それが文がになう情報の各部分に段層的な律動を帯びさせ、その情報の焦点をより効果的に構造形式上に浮き立たせようとする表現法である以上、文体的には、多分に人為的で修辭的な技巧を加えられたものとみなさざるをえない。この構文は強調を目的としているが、この場合の強調とは、もともと、is または was のもつ同定作用 (Identification) によって、いくつかの概念のうちの一つに、他との対照によって卓立性 (Prominence) を与えることによるものである。上の例のうちでも、(1) と (4) と (9) を除いて、他はすべて、It is または It was の叙述語が肯定に対する否定か、あるいは否定に対する肯定という相対立する二つの概念のうち、そのいずれかを明確に指定する表現を含んでいる。このような明確な対照による強調は、喚情的強調というよりは、むしろ理知的強調といふにふさわしいものであり、この構文の理知性を象徴している。上にあげた諸例が、一般に、格調のある理知的文体の文章からの引用であることを見ても、この点が首肯されよう。

(9) 今回稿 柳下十子稿 概観第一

このように、分裂文は、どちらかと言えば、形式ばった文体価値をもつ表現様式である(3)。そういう修辭的な構文が現代英語の特徴ある表現法として特異な地歩を固めているという事実は、それがそれなりに英語統語法の伝統的な特質に適合している。本論の目的は、それがどのようにに英語の歴史的土壌に根ざし、近代にかけて発達しお世話かかを考察することにある。

(1) *The New English Bible* (Oxford U. P., 1970) の略。

(2) "Cleft sentence" という名称は、初め Otto Jespersen が *Analytic Syntax* (Allen & Unwin, 1937) の §25, 4ff. において称えたものであるが、近年では変形生成文法学派によっても使用され、また現代における記述英文法の集大成ともいふべき Q. Quirk, S. Greenbaum, & G. Leech: *A Grammar of Contemporary English* (Longman, 1972) の §14, 18ff. も、この名称によつた解説を施している。

(3) しかしまた、この構文が、特に、つぎのような関係代名詞や接続詞を表わさない構造によつて、きびきびした口語調に適應して用いられる一面も注意すべきであるう。 *It was the sea killed him, sucked him under.* —J. Wain, *The Life Guard*. (彼を殺したのは、吸い込んで行ったのは、海だっただす) / *It's in company you're having?* —

W. Gather, *Coming, Aphroditel!* (あんた、お客さんでもあると言うんですか。)/ *I'll tell you this now, it's not so much you I'm worried about...*; *it's not so much you as Janice.* —J. Uplike, *Rabbit, Run.* (とこでいいかね、おれの心配しているのは君のことじゃない、...君のことというよりも、むしろジャニスのことなんだ。)/ *Why do you beg my pardon? It is not to me you should do that.* —J. Galsworthy, *The Apple-Tree* IV. (なぜ私に許してなどとおっしゃるの。そんなこと私に向かって言うべきことではないわ。)

II 名詞語句強調型の発達

I 古期英語

いま、英語における名詞語句強調型の分裂文の歴史的発達の環境的要因を訪ねるに先立って、英語の統語法上の特質を明らかにするために、現代のドイツ語とフランス語における現象を対照的に眺めてみよう。I の(5)にあげた例は新約聖書の *Matthew* x. 20 からのものであるが、下に、同じ箇所ドイツ語訳⁽¹⁾とフランス語訳⁽²⁾を記してみる。

D: Denn nicht ihr seid es, die dann reden, sondern

der Geist eures Vaters ist es, der in euch redet.

F: *car ce n'est pas vous qui parlerez, c'est l'Esprit de votre Père qui parlera en vous.*

これで知られるように、ドイツ語訳でも、フランス語訳でも、関係詞節内の述語動詞が関係代名詞の実質的な先行詞 (ihr, vous) と一致して、複数形 (reden⁽³⁾, parlerez) で用いられている点では、英語の場合と同じであるが、主節の形態が、フランス語訳では *c'est...* で、英語の *it is...* と並行しているのに対し、ドイツ語訳では、形式上の主語として *es* が用いられているのにもかかわらず、述語動詞は *seid* となっていて、卓立性を与えられている *ihr* と一致している。I で述べたように、分裂文において卓立性を与えられている部分が *it is* のつぎの位置に置かれるのは、心理的述語を文法的述語に顕現化したことを意味するとするならば、ドイツ語の現象は、その文法的述語化の過程が完遂されず、中途に留まっているものということになる。それに対し、フランス語では、近代英語の場合と同様、卓立要素の分裂文法的叙述様式が十分に確立されている。一般に、フランス語も近代英語も、語順が論理的に安定し、分析的な同

定叙述の統語構造を比較的によく発達させている。それに引きかえ、ドイツ語は総合的性格をより多分に保持し、分裂構文の発達の上にも、古い形態的総合性の痕跡を留めているといえる。

しかし、上の傾向も近代英語を対照の中心に置いて述べたことである。英語も、古期英語 (Old English) の時期では、ドイツ語の現象と同様な状態を、いっそう素朴な形で呈示していた。そこで、まず、類型的な例として、*It is I that have done it.* という分裂文を取り上げ、その主節をなす *It is I.* という同定陳述が古期英語ではどのような表現であったかを眺めてみよう。聖書の A. V.⁽⁴⁾ の *Matthew* xiv. 27 や *Mark* vi. 50 や *John* vi. 20 などに、*It is I.* が見られる⁽⁵⁾。それはフランス語訳では *C'est moi.* であるのに対し、ドイツ語訳では *Ich bin es.* である。源にさか上って言えば、これは、ギリシヤ語訳⁽⁶⁾の *ἐγώ εἰμι*, ラテン語訳⁽⁷⁾ *ego sum* に相当する表現である。このように、ギリシヤ語でも、ラテン語でも、同定の陳述機能を果たすべき *eîmu, sum* という定形動詞が、心理的にはその叙述語であるべき要素に、文法的には主語に対する述語動詞と見られる形で結

びつけられている。この表現法が1389年の Wyclif 訳⁽⁸⁾では、そのまま踏襲されて I am. と表現されている。さて、995年の A.-S. Gosp.⁽⁹⁾ による上の箇所の表現は Ic hit eom. となっている。この古期英語の表現では、陳述の主題とみなされる事態をさす代名詞として hit が用いられている。それがギリシヤ語やラテン語式の「主語十述語」構造の ic eom に加えられているのであるが、陳述における主語としての力を形態上で發揮し切れないでいるというのが、この古期英語表現の実態である。つまり、心理的叙述語である ic を端的に文頭の位置に掲げて強調し、それと文法上で一致する形態の eom を結合させる直観的な陳述様式が一方において固定しており、他方、それを論理的に整備する契機として hit が加えられて、統語的な同定陳述の具現化へ踏み出した段階の現象といえることができる⁽¹⁰⁾。ドイツ語の Ich bin es. は、正にそういう段階を現代にまで保持しているものといえる。

このように、古期英語に用いられた hit が同定陳述の主題となる事態を暗示する機能を果たしていたが、その事態があとに続く関係詞節によって敷衍されることがあ

った。いわば、同定陳述の拡張であるが、ここに近代的な分裂構文の萌芽がうかがわれる。あるいはまた、hit が表われず、端的に強調された名詞語句に、それを先行詞とする関係詞節が接するという、いっそう素朴な表現法も見られた。たとえば、I (5) に引用した *Matthew x. 20* は A.-S. Gosp. では、

(1) *Ne sywi ge na ðe ðær sprecaþ, ac eowres fæder gast, ðe sprycþ on eow.*

となっており、関係詞の *ðe* は *ge* を先行詞とする構造に用いられている。それはラテン語訳聖書の

(1a) *non enim vos estis qui loquimini sed Spiritus Patris vestri qui loquitur in vobis*

に準じる構造であることが知られる。(1)の主節の主語が *ge* であることは明らかであるが、それが意味上で叙述語としての重みを担わせられており、その重みがあとの *ðe* 以下の関係詞節によって支えられるという観を呈している。

いま、A.-S. Gosp. の *John* に見られる分裂構文またはそれと関連した構文の例を調べてみると、全部で13例あり、それがつぎの4型に分類される。上の(1)の属す

るのは A 型である。

- A. ...is ðe~ の型: 3 例 (i. 27, viii. 54, xiv. 21).
B. ...is se [...se is] ðe~ の型: 6 例 (iv. 10, v. 45, vi. 63, xiii. 24, xiii. 26, xxi. 20).
C. se ðe~se hit is の型: 1 例 (ix. 37).
D. hit is... [ic hit eom] ðe~ の型: 3 例 (iv. 26, v. 15, xiv. 24).

このうち、B 型は、関係詞節が明確な先行詞としての指示代名詞 se に伴っているもので、se ðe~で名詞的な主語節をなしており、それに先立っている名詞語句は is の叙述語と解される。それは関係詞節の制限的機能を順当に發揮した構文であり、分裂構文とはいえないものであるが、端的な強調の効果はあげられている。C 型は se ðe~による名詞節を首位に立て、のちにそれを改めて se で受けて、hit is の叙述語として配置している重複構文であり、同定機能をもつ hit is が用いられている点に注意される。いわば分裂文の原始的現象である。近代的分裂文の直系的原型は D 型であるが、それと A 型との関連を探らなければならない。下に各型の例を摘記しよう。各例にラテン語訳 (およびポーラ語訳⁽¹⁾) を参照し

うるものにはポーラ語訳) と A. V. 訳とを付記して、問題の構造の発生と発達の事情を考える上での参考とする。

- A. (2) *John* i. 27: *He is, ðe æfter me toweard is, se wæs geworden beforan me, (L: ipse est qui post me venturus est qui ante me factus est)* (A. V.: *He is, who coming after me, is preferred before me,*)
(3) *John* viii. 54: *min fæder is, ðe me wuldtrap, (L: est Pater meus qui glorificat me)* (Goth.: *ist atta meins, saei haneip mik*) (A. V.: *it is my Father that honoureth me,*)
(4) *John* xiv. 21: *he ys ðe me lufap; (L: ille est qui diligit me)* (Goth.: *sa ist saei friyop mik*.) (A. V.: *hee it is that loneth me*);
B. (5) *John* v. 45: *se is ðe eow wregp Moses, on ðone ge gehlyhtap. (L: est qui accuset vos Moses in quo vos speratis)* (Goth.: *ist saei wrohida izwis Mosses, du þammei yus weneip*.) (A. V.: *there is one that accuseth you, euen Moses, in whom ye trust*)
(6) *John* vi. 63: *Gast is se ðe gelifæst, (L: Spiritus*

est qui vivificat) (Goth.: *Alma ist saei liban tauyþ*.)
(A. V.: *It is the Spirit that quickeneth.*)

(7) *John* xiii. 24: *Hwæt ys, se ðe he hyt big seþ?*
(L: *quis est de quo dicit*) (Goth.: *Wnas wesi, bi þan ei qap?*) (A. V.: *who it should be of whom he spake.*)

C. (8) *John* ix. 37: *se ðe wið ðe sprycþ, se hit is.* (L: *qui loquitur tecum ipse est*) (Goth.: *saei rodeþþ miþ þus, sa ist.*) (A. V.: *it is he that talketh with thee.*)

D. (9) *John* iv. 26: *Ic hit eom, ðe wið ðe sprece.*
(L: *ego sum qui loquor tecum*) (A. V.: *I that speak unto thee, am hee.*)

(10) *John* v. 15: *ðæt hit wære se Hælend ðe hyne hæælde.* (L: *quia Iesus esset qui fecit eum sanum*) (A. V.: *that it was Jesus which had made him whole.*)

(11) *John* xiv. 24: *mis hyt min spræc, ðe ge ge-hyrdon, ac ðæs fæder, ðe me sende.* (L: *sermonem quem audistis non est meus sed eius qui misit me Patris*) (Goth.: *patawaund þatei hauseiþ, mist mein, ak þis sandyandins mik, attins.*) (A. V.: *the word*

which you heare, is not mine, but the Fathers which sent mee.)

これによって知られることは、D型のような願文的な分裂構文は、何らラテソ語やゴート語の影響によることなく、独自に古期英語の地歩の上に発生しているといふことである。それに対し、A型は、強調されている名詞語句と関係詞節が連続している点で、ラテソ語やゴート語の場合と平行している。A型に見られる関係詞節は、直接に先行詞の概念を限定する機能と、潜勢的な同定陳述を追加的に敷衍する機能とを未分節のままに一体にしていると解されよう。この未分節な原型ともいふべきA型の“...is ðe~”が、一方においては、名詞語句に対して従属的な関係詞節に文構造上の自立性を与えたB型の“...is se ðe~”と、他方においては、顕現的な同定陳述の拡張型ともいふべきD型の“hit is...ðe~”とに分節され、統語構造上で明晰化されていると見ることができよう。

D型の文で、関係詞が文法的に呼応している先行詞は、hit (or hyt) があるにもかかわらず、依然として強調されている名詞語句であることは、文法的一致を形態上に

顯示している (9) によっても明らかである。(9) における関係詞節内の述語動詞 *sprece* は主節における *ic* と一致して、1 人称の直説法現在形であることに注意すべきである。

- (1) フォイツ語聖書からの引用(略G)は、*Die Bibel* (Herder, 1965) による。
- (2) フランス語聖書からの引用(略F)は、*La Sainte Bible* (ed. Louis Segond, 1959) による。
- (3) もっとも、フォイツ語訳では、*reden* は数においてのみ *ih* と一致した複数形であるが、人称の点でも一致して 2 人称形とはなっていない。つぎの例を参照されたい。redet は *ich* とではなく *es* と一致した 3 人称単数形である。Ich bin es, der mit dir redet. — *John* iv. 26.
- (4) 1611 年刊行の *The Authorised Version of the Bible* の略。引用は W. A. Wright 編の Cambridge 版 (1909) による。
- (5) この *It is I* から、さらに 16 世紀末以降の口語体において、*It is me*. (cf. F: *C'est moi*.) に推移するのは顯著な事実であるが、この新形式の普及を、つぎのような分裂文の現象と関連させて考察することもできる。it is *thee* I feare. — Shakespeare, 2 *Hen. VI* iv. i. 117 [1593]. (気味の悪いのはお前だ。)/It is not *me* you are in love with, …—Steele, *The Spectator*, No. 290 [1712]. (あ

なたが恋をされているのは私ではありません。)

- (6) ギリシャ語聖書からの引用は、*The Interlinear Greek-English New Testament* (Bagster, 1959) による。
- (7) ラテン語聖書からの引用(略L)は、*Biblia Sacra: Vulgata* (Württembergische Bibelanstalt, Stuttgart, 1969) による。
- (8) Wyclif 訳聖書 (1389) からの引用(略Wycl.) は、J. Bosworth & G. Waring, ed.: *The Gothic and Anglo-Saxon Gospels with the Versions of Wycliffe and Tyndale* (Reeves & Turner, 1888) による。
- (9) *The Anglo-Saxon Gospels* (995) の略。引用は Bosworth & Waring, *op. cit.* による。
- (10) 松浪有氏は、その著『英語史研究』(松柏社, 1964) の「Disjunctive Construction——その歴史的考察」(p. 75 頁)において、古期英語の *ic hit eom.* は *Hit eom ic.* をもととする述べ、後者における述語動詞が文法的に叙述語と一致する慣用に鑑み、*ic hit eom.* にあっても、*hit* が主語で *ic* が叙述語であることを強調している。筆者とやや重点の置き方を異にしているが、筆者が本論を草するに当たり、この松浪氏の論文を参考とするところの多かったことを記し、同氏に謝意を表したい。
- (11) フォート語聖書 (360) からの引用(略Goth.) は、Bosworth & Waring, *op. cit.* による。

ii 中期英語

sente,

—*Piers Plowman* C 236—7 [c. 1377].

分裂構文の中期英語 (Middle English) における発達も、少なくとも名詞語句強調型に関しては、it を形式上の主語とする同定陳述様式の確立を軸として考察されるべきであろう。i に述べた古期英語の *Ic hit eom.*のうち、hit が主語としての性格を語順の上に顕示して、首位を占め、逆に ic が叙述語としての性格を明らかにするため、述語動詞のあとに位置を占める *It am I.* の形式が見られるようになるのは、14世紀にはいつてからのことである⁽¹⁾。この OE *Ic hit eom.* → ME *It am I.* の過程は、古い形態上特徴を保持したまま、語順上で“主語+同定機能の be の定形+叙述語”という論理的な同定陳述様式が整えられて行く過程を象徴している。この *It am I.* における叙述語 I の概念を一段と明確なものにするために、関係詞節が追加されることがある。つぎのような14世紀の用例は、やはり萌芽的な分裂構文として注目されよう。

(1) *Hit am ich that fynde alle folke and fram
hunger saue,*

Thorgh the heye helpe of hym that me hyder

(=It is I that provide for all the people and save them from hunger, with the heavenly help of Him, who has sent me here.)

(2) *I am thy mortal foo, and if am I*

That loveth so hooete Emelye the brighte

That I wol dye present in hir sighte.

—Chaucer, *C. T.*, A, “The Knight’s Tale,” 1736—38 [c. 1386].

(=I am your mortal enemy, and it is I that love the bright Emily so fervently that I will die now in her sight.)

(3) *For if ben nat ge that speken, but the spirit
of youre fadir, that spekih in you. —Wycl., Matt.
x. 20 [1389].*

特に、(2) の関係詞節における述語動詞 *loveth* が、強調されている人称代名詞 *I* とは一致せず、it と一致して3人称形で表現されている点が注意される。同種の現象は後代の用例にも散見されるものであり⁽²⁾、この構文

の論理的意味関係の影響による現象と考えられるが、また、主節の *it am I* という形式が、*it* を叙述語とみなし、関係代名詞の *that* につながるものと見る意識に影響していると考えられる。

(3) の Wyclif 訳聖書の例は (1) の古期英語の例に該当する。両者を比較してみても、先に述べた A 型から D 型への発達の跡を明らかに認めることができる。

いままし、この過程を、*i* に引用した *John* の例について、Anglo-Saxon 訳と Wyclif 訳とを対照的に観察してみよう。*John* の A.-S. Gosp. からの 13 例のうち、(11) としてあげた xiv. 24 が Wyclif 訳では他の構造の表現となっている代わりに、A.-S. Gosp. に見られぬい分裂構文の例が Wyclif 訳の xviii. 14 に見られる。これら 13 例のうち、*it* を含まない A 型が iv. 26 と viii. 54 の 2 箇所に見られるほかは、残る 11 例はすべて *it* を含む D 型をなしている。下にそれを列挙する。

A. (4) *I am, that speke with thee.* —Wycl., *John* iv. 26 (cf. i (9)).

(5) *my fadir is that glorifieth me,* —*ibid.* viii. 54 (cf. i (3)).

D. (6) *He it is, that cometh afir me, that is maad bifore me,* —*ibid.* i. 27 (cf. i (2)).

(7) *If thou wistist...who it is, that seith to thee,* —*ibid.* iv. 10 (cf. A.-S. Gosp. (B): *Git þu wistest...knewet se is, ðe cwyrp to ðe./A. V.: If thou knewest...who it is that sayth to thee.*)

(8) *for it was Ihesu that maad him hool.* —*ibid.* v. 15 (cf. i (10)).

(9) *it is Moyses that accusith þou, in whom 3e hopen.* —*ibid.* v. 45 (cf. i (5)).

(10) *It is the spirit that quykeneth,* —*ibid.* vi. 63 (cf. i (6)).

(11) *he it is, that spekith with thee.* —*ibid.* ix. 37 (cf. i (8)).

(12) *Who is it, of which he seith?* —*ibid.* xiii. 24 (cf. i (7)).

(13) *He it is, to whom I schal dresse breed dipped yn.* —*ibid.* xiii. 26 (cf. A.-S. Gosp. (B): *He ys, se ðe ic ræce bedyppedne hlaf./A. V.: Hee it is to whom I shall giue a soppe, when I haue dipped it.*)

(14) *he it is that loueth me; —ibid. xiv. 21 (cf. i (4)).*

(15) *Sothli it was Cayphas, that gaf counceil to the Jewis, —ibid. xviii. 14 (cf. A.-S. Gosp.: Witodlice Caiphas dihte ðam Iudeon/A. V.: Now Caiaphas was he which gaue counsell to the Jewes.)*

(16) *Lord, who is it, that schal bitraye thee? —ibid. xxi. 20 (cf. A.-S. Gosp. (B): Drinten, hwæt ys, se ðe ðe belæwp?/A. V.: Lord, which is hee that betraieþ thee?)*

このうち、(4)に見られる I am (that...) は、Wyclif 訳がラテン語聖書における ego sum (qui...) を形式的に踏襲した結果と解されるが、問題の構文の発達に関し、興味深い現象を呈示している。

以上、分裂構文の発達を、その核心的要因として Ich hit eom. → It am I. の同定陳述様式の確立過程を取り上げて観察した。14世紀に見られるこの過渡的な It am I. は、やがて it の主語としての意識が強まるにつれ、繫合詞の be はその it と形態上で呼応し、is で表わされるようになり、It am I. から It is I. に推移する。

こうして It am I. は15世紀末に消失するが、論理的に整備された新しい It is I. の確立は、英語の特徴ある統語様式としての分裂文がその地歩を確固たらしめた時期に完了している。

新しい "It is I that have done it." 式の表現形式は14世紀に始まるが、つぎに、14, 5世紀の作品からの例をあげる。

(17) *For it is I that am come downe
Through change and revolution!*
—*The Romant of the Rose* 4365—6 [c. 1400].

(有為転変を重ねて来たのがわたしたちだから。)
(18) *it is not he that slowe the man, hit is I. —Gesta Romanorum* xlvii. xx [c. 1440]. (あの人を殺したのは彼ではない、わたしたちだ。)

(19) *'Hit was I,' seyde Balyn, 'that slew this knyght in my defendaunte; ...—Malory, Le Morte Darthur* II. vii. 71 [1470]. ('わが身を護るためとはいへ、この騎士をあやめたのは私でした') とバリンが言った。)

(20) *I wyst hit were thou that thus traytourely*

haste hurte thys noble knyght, ...—*ibid.* ix. xxxviii.

547. (かくも卑怯にこの気高い騎士に傷を負わせたのがお前だったとは知っていた。)

(21) *hyt is yourself that I love so well; ...—ibid.*

iv. xxiii. 169. (わたしが本当に愛しているのはそなたの方なのだ。)

(1) Cf. F. Th. Visser, *An Historical Syntax of the English Language*. I (Brill, 1963), §262 ff.

(2) つぎに、近代英語の口語体で、関係詞節内の述語動詞が it と一致している具体例をあげる。It is the cat's eyes, fool, that shineth in the dark. —Mr. S. Mr. of Art, *Gammer Gurton's Needle* I v. 36 [1575]. (おほかさんだね、暗がりの中で光っているのは猫の目だよ。)/For it is you that *puts* vs to our shifts: —Shakespeare, *Tit. A.* iv. ii. 176 [1594]. (お前のおかげで、みんなこんなことになっちゃったんだから。)/It's the children that's preying on his mind, ...—J. Galsworthy, *The Sinner* Box III [1909]. (この人の心を悩ましてるのは子供たちのことなんです。)

iii 近代英語

近代英語 (Modern English) における分裂文の発達の状況は i と ii で A.-S. Gosp. や Wycliff 訳の *John* から

の引例に添記した A. V. の表現によっても、十分にう

かがわれよう。しかし、分裂文の発達が証明されるのは、1611年刊行の A. V. よりもなお早い、1526年刊行の Tyndale 訳新約聖書⁽⁴⁾における現象によってである。いま、i (1) と ii (3) とにあげた *Matthew* x. 20 の Tyndale 訳と A. V. 訳とを記せば、つぎのようになる。

(1) Tyn.: For it is not ye that speke, but the sprete of your father, which speaketh in you./A. V.: For it is not ye that speake, but the Spirit of your Father, which speaketh in you.

つぎに、*John* における分裂文の用例について、Wycliff 訳と Tyndale 訳と A. V. 訳とを比較してみれば、つぎの結果となる。(a) Wycliff 訳に見られる13の分裂文のうち、Tyndale 訳と A. V. 訳とに共通して、i. 27, iv. 10, v. 15, vi. 63, viii. 54, ix. 37, xiii. 24, xiii. 26 の8箇所が完全な "It is [was]...+関係詞節" 型の分裂文で維持されている。(b) Wycliff 訳の分裂文のうち、Tyndale 訳と A. V. 訳とに共通して、分裂文でない他の表現形式に代えられているのは、iv. 26, v. 45, xviii. 14, xxvi. 20 の4箇所であり、Tyndale 訳だけで他の表

現形式に代えられているものに、xiv. 21 がある。逆に、(c) Wyclif 訳で他の表現形式に代えられているのに、Tyndale 訳と A. V. 訳とで分裂文が用いられているものに、つぎの vi. 71 がある。

(2) *he itt was that shulde betraye hym*, —Tyn., *John vi. 71/hee it was that should betray him*, —A. V., *ibid.* (cf. A.-S. Gosp.: *ðes hime be læwde*,/Wycl.: *this was to bitrayinge him*).

また、(d) Wyclif 訳も A. V. 訳も他の表現形式になっているのに、Tyndale 訳だけに分裂文が用いられているものに、つぎの xvi. 19 がある。

(3) *This is it that ye enquire of bitwene youre selves*, —Tyn., *John xvi. 19* (cf. A.-S. Gosp.: *Be ðam ge smeageaþ betwýnan eow*,/Wycl.: *Of this thing ze seken a mong 3ou*,/A. V.: *Doe ye enquire among your selues of that...?*).

以上は各期の英訳聖書の表現を比較してみることによって、英語における名詞語句強調型分裂文の発達を跡づけたものであるが、以下に、なお、近代初期から 19 世紀に至る作家から具体例を摘記して、この構文がよく理

知的であると同時に簡勁な律動性を帯びて、英語の文体を引き立たせている状況をうかがおうと思う。

(4) *I will show Custance it was I that did offend*. —Udall, *Roster Doister* III. v. 103 [c. 1553]. (カヌクスに失礼なことをしたのはわたしだったと言ってるう.)

(5) *Ynkle, tis this that makes me impatient*. —Marlowe, *Edward II* 716 [1593]. (叔父上、わたしがじっとしておられんのはこのことなのです.)

(6) *poore Lord, is't I
That chase thee from thy Countrie, and expose
Those tender limbes of thine, to the euent
Of the none-sparing warre? And is it I,
That drine thee from the sportine Court, where
thou
Was't shot at with faire eyes, to be the marke
Of smoakie Muskets?*

—Shakespeare, *All's Well That Ends Well* III. ii. 105—11 [1603].

(ああ、お気の毒な、あなたをお国から追い出して、情

け容赦のない戦いの場にひ弱いお体をさらされたのはわ
たしなのでしようか。あなたを、綺麗な人たちの目の一
斉射撃を浴びていらした陽気な宮廷から追いつ出し、硝
煙のくすぶる銃の的にさせたのはわたしなのでしよ
うか。)

(7) *It is you who have taught him this lesson, ...*
—Fielding, *Tom Jones* V. viii [1749]. (あの人にこ
の教訓を授けてやったのはあなただです。)

(8) I'll fairly own, that *it was I that instructed*
my girls to encourage our landlord's addresses. —
Goldsmith, *The Vicar of Wakefield*, vii [1766]. (はっ
きり言わせてもらいますけど、娘たちに地主さんの気を
誘って言い寄らせるように仕込んだのはわたしだったん
です。)

(9) *It is this which has given its character to*
modern Europe. ... It was this opinion which mitigated
kings into companions, and raised men to be fellows
with kings. —Burke, *Reflections on the Revolution in*
France (Pelican Classics, p. 170) [1790]. (近代ヨ
ロッパにその性格づけをしたのがこれなのです。…国王

の心をなだめ、われわれの仲間とし、人々を振り起たせ
て国王と対等な立場に立たせたのも、この世論だったの
です。)

(10) *It is very often nothing but our own vanity*
that deceives us. —Jane Austen, *Pride and Prejudice*
xxiv [1813]. (私たちが思い違いをするのも私自身のひ
とりがりから以外ではないことがよくあるのです。)

(11) But I must be permitted to observe that *it*
is not the feeling sure of a doctrine... which I call an
assumption of infallibility. —J. S. Mill, *On Liberty*
ii [1859]. (しかし、私が絶対確実の想定と称してい
るのは、ひとつの教義を確信することではないとい
うことを述べさせてもらわなければならない。)

(12) So that *it was the Psychologist himself who*
sent forth the model Time Machine on its interminable
voyage. —H. G. Wells, *The Time Machine* ii [1895].
(従って、模型タイムマシーンを果てしのない飛行の旅
へ発進させたのは、他ならぬ心理学者自身であった。)

(1) Tyndale 訳聖書からの引用 (略 Tyn.) は, Bosworth
& Waring, *op. cit.* による。

III 副詞語句強調型の発達

以上、筆者は "It is I that have done it;" における It is のもつ同定陳述の機能に分裂文を形成する契機を認めるといふ観点に立って、言語史的考察を試みた。

いま一つ考えられるべき点は、It...that~ という相関的な二重導入語による複文構造が強調構文に適合している点である。II i の *John* からの引例のうち、B 型として扱った古期英語の ...is se ðe~ または se is...ðe~ は、3人称単数中性の人称代名詞の hit の代わりに、もつと具象的な力をもつ指示代名詞 se を用いているものと見ることが出来る。特に、II i (5) にあげた *John* v. 45 の表現は、指示詞 se と指示詞起源の関係詞 ðe⁽⁴⁾ とを相関的に、それぞれ主節と従節を導くのに用いて、主節の叙述語を強力に指示する、古期英語に特徴的な二重指定詞構造 (Double determinative construction) の一種とみなされよう。この二重指定詞構造がいっそう端的な形で見られるのは、つぎのような表現においてである。

(1) *þæt wæs geocor sið,*

þæt se hearnscapa to Heortute ateah!

(=It was a grievous journey that the injurious foe had made to Heort!)
(2) Ne wæs *þæt* gewrixle til,

þæt hie on ba healfa biggan scoldon
freonda feorum! —*ibid.* 1304—6.

(=It was no good exchange that they should pay on both sides with the lives of loved ones.)

(3) Næs *þæt* þonne maetost mægenfuluma,
þæt him on ðearfe lah ðyle Hroðgares;
—*ibid.* 1405—7.

(=Then it was not the least of the powerful helps that Hrothgar's spokesman lent him in his need.)

これらの例で、従節を導いている *þæt* は、いづれも中性対格の関係代名詞とみなされるものであるが、その *þ-* による指示詞起源の外形的特徴を留めたまま、主節における中性主格の指示代名詞 *þæt* との間に端的な相関関係を顕示し、*Þæt...þæt~* という二重指定詞構造を形成し、外形上から強調的な同定陳述を際立たせている。なお、注意すべきなのは、関係詞の *þæt* が形態上で主

節の叙述語と一致しておらず、主節の主語の *þæt* と一致していることである。(2) では, *gewixle* (=exchange) が中性名詞であるので, あとの *þæt* はこの語と一致していると考えられようである。しかし, (1) の *sið* (=journey) は男性名詞であり, (3) の *maetost* (=least) は続く限定語の *mægenfultma* (=of the powerful helps) という属格複数形の男性名詞から推して, 男性の最上級形容詞の独立形とみなされる。従って, (1) (3) とも, あとの *þæt* はこれらの語とではなく, やはり指示代名詞の *þæt* と一致しているものと解され, それに準じて, (2) における関係詞 *þæt* も指示代名詞の *þæt* と一致していると解されることとなる。

ここで, われわれはさらに一步を進めて, 古期英語の端的な二重指定詞 *þæt...þæt*~ におけるあとの *þæt* の本質に迫ってみなければならぬ。上の *Beowulf* からの3例では, この *þæt* はその導く節内で目的語の機能を果たしていることとみなすことができよう。しかし, そのような格関係を示す代名詞性は, いわば統語形式上で解釈される事象であり, この *þæt* のより本質的な機能は, 前の指示詞 *þæt* と呼応して, 続く従節をあらかじめ

め指定している連結詞としてのものと言わなければならぬ。同じ *Beowulf* から引かれるつぎの例における現象も, (1) ~ (3) の現象に相通じるものとみなされるべきである。

(4) Nis *þæt* feor heonan
mīlgemeares, *þæt* se mere standeð;
——*ibid.* 1361—2.

(=It is not far hence, in miles, that the lake stands.)

この文では, 主節の叙述語は場所を示す副詞語句であり, 従節を導く *þæt* は主節の主語の *þæt* と呼応する位置に表現された従位接続詞とみなされる。しかし, 端的強調を主旨とする二重指定詞構造の特徴から言って, この接続詞 *þæt* に対し, (1) ~ (3) に見られる斜格の関係詞 *þæt* が統語的共通性を湛めているといえるのである。

同類の現象を古期英語の作品から, なお2例引用しよう。

(5) *þæt* for mīcel gecyrd, *þæt* urum lichoman
cynnþ call his mægen of ðam mete þe we ðigap, and
ðeah færþ se mete ut þurh ðone lichomon. ——*Boethius*

xxxiv. xi. (=It is through great nature that all strength comes to our body from the food that we eat and yet the food goes out through the body.)

(6) *Dæi* was on þone Monardæg æfter sancta Marian mæsse, *þæt* Godwine mid his scipum to Suð-geweorce becom. — *The Anglo-Saxon Chronicle*, C, an. 1052. (=It was on Monday after Saint Maria mass that Godwine arrived at Southwark with his ships.)

無論 この“*Dæi* is...*þæt*~”の構文は副詞語句ばかりではなく、名詞語句を強調するにも用いられたが、2番目の *þæt* の本質が従位接続詞であったことを考え合わせると、それが上の(4)(5)(6)におけるように、副詞語句を強調するのに、より適応した潜在性をもったものといえよう。

しかし、一方においては、いっそう軽妙で理知的な語調を帯びる *hit* が副詞語句強調型の複文を導く形式上の主語として用いられ、特に中期英語において多く見られるようになる。“That is...that~”を重複様式による直観的強調型とするならば、“It is...that~”は均斉のある理知的卓立型ともいべきものであるが、後者が、形

式上で、複文構造による一般的な陳述様式として慣用化しつつあった“*It*...*that*~”型と合致していることもあり、中期英語では次第に優勢となった。それに引き換え、前者は標準的な統語形式としては、その存在価値を失うに至った。

下に、中期英語における副詞語句強調型としての“*It* is...*that*~”の用例をあげる。

(7) *Ah nes hit* buten ane while, *þat* þer com an oðer time. — *Layamon*, *Brut* 11014—5 [c. 1205]. (=But it was only a while before there happened a change of events.)

(8) *Swa hit* is here, *þat* se gode man þe godes lufe hæð zefolged to is ende cunþ...þer cunneþ þe hali engles him to. — *The Lambeth Homilies* xxx [a. 1225]. (=As it is here that the good man who has followed God's love comes to his end...there come the holy angels to him.)

(9) *Du ne singst* neuer one sipe
Dat hit nis for sum unsipe
Hernore hit is *þat* me þe slunneþ.

—*The Owl and the Nightingale* 1163—5 [c. 1250].

(=You never sing except for some mishap; it is therefore that people detest you.)

(10) So *it was* in the month of May *that* she and sir Gawayne wente oute of the castel and sowped in a pavylyon, ...—Malory, *Le Morte Dantwur* iv. xxiii [1470]. (かくして、彼女とサ・ガウエインが城をあとにし、天幕内で夕食を共にしたのは5月のことであった。)

このうち、特に (7) では、hit が本来の事態 (この場合には、述べようとしている事態の起こる時) を漠然と示す代名詞としての機能をもち、あとの *that* は、その事態の叙述に対し、追叙的な内容を述べる並行的な節を導いているとも解される。そして、同様な意味構成は、多かれ少なかれ、(8) (9) (10) にも認められる。しかし、そのような起源的な特徴をはらんだ構文形式が全文における意味上の焦点を強調している事実には変わりがない。その点に、近代英語において特異な表現価値を發揮している副詞語句強調型の分裂文を醸成せしめる十分な素地が見出されるのである。

つぎに、近代英語の例として、18世紀と19世紀からのものをつけ加えておく。

(11) *It is*, perhaps, for the same Kind of Reason, *that* few Books written in English have been so much perused as Doctor Sherlock's Discourse upon Death; ...—Addison, *The Spectator*, No. 289 [1712]. (英語で書かれた書物の中でシャローック博士の死亡論ほど多くの人々に熟読されて来たものの少ないのも、恐らく同様な理由によることであろう。)

(12) *It was* with equal surprise and pleasure *that* on his arrival at a place called Saxa Rubra...he discovered the army of Maxentius prepared to give him battle. —Gibbon, *The Decline and Fall of the Roman Empire* xiv [1788]. (彼がサクス・ルーブラと呼ばれる所に到着するやマクセンティウスの率いる軍隊が自分に戦いを挑もうとしていたのを知ったのも、同じ驚きと喜びを味わったことであつた。)

(13) *it was* but the other day *that* I recommended another young person, ...—Jane Austen, *Pride and Prejudice* xxxix [1813]. (もう一人若い方を推薦して上

(22) げたのもつい先達てのことでした。)

(14) *It was here that I was destined, at a later date, to have a very strange experience...*—H. G. Wells, *The Times Machine* VI [1895]. (後日のことですが、わたしが実に不思議な経験をすることとなるのが、この場所だったので。)

(1) 古期英語の無屈折の関係詞 *þe* [ðe] は中性単数の指示代名詞 *þæt* などとともに、原始ゲルマン語の指示語根 **to-*, *t-* (→*p-*) に由来する。なお、男性・女性単数の指示代名詞 *se*, *seo* も、同じく原始ゲルマン語の指示語根 *s-* に由来するが、後期古期英語で *s-* は *p-* に取って代わられ始めている。

(2) “That is+名詞語句+that~”型は、中期英語でも、つぎのように用いられている。 *Þæt wass þe land off Galileo þatt himm wass bedenn sekenn, —Ornnulum 8465—6 [c. 1200]. (=It was the land of Galilee that he was asked to seek.)*

IV 結び

以上、われわれは、古期英語の同定陳述形式の *Io hit eom.* の拡張形としての関係詞節を伴う複文構造と、

“*Þæt is... þæt~*”型の二重指定詞構造とに、英語の分裂文の起源を求めて、観察を試みた。前者が名詞語句強調型を発達させる原型とみなされ、後者が特に副詞語句強調型を発達させるにふさわしい素地をなしていたといえる。このうち、全体としての構文の発生という観点からは、むしろ二重指定詞構造のほうが、多分にゲルマン語としての英語の統語的特質を象徴しており、それだけいっそう原型的の値が認められる。しかし、特に中期英語以降において、“先行の *it*+実質的主語としての *that*-clause” という類型的構文が英語の土壌に益々深く根差してゆくにつれて、二重指定詞型が同定陳述拡張型に吸収され、名詞語句強調型と副詞語句強調型との両者を包摂した分裂文を確立せしめるに至った。

分裂構文は、意味上の強調を構造上の強調に調整して、英語の複文構造の本然的リズムに適合しえている。It is I who have done it. は、このように断定的な律動感を帯びた特異な表現様式である。しかし、その反面、I am the man who has done it. 式の表現にくらべ、統語関係の論理性に欠けているといえる。上に本論中にあげた具体例中でも、II ii (15) (16) の Wyclif, *John xviii.*

(23) 英語における分裂文の発達

14, xxi. 20 に付記した A. V. 訳などが後者の型をなしたものである。このような非分裂型の構文は論理的ではあるが、平板な調子が免かれず、また he that~, they which~ などは今日の英語で古風な語法と感ぜられるよ

うになっていることなどを考え合わせるとき、英語の構文体系においてになう分裂文の特異な存在価値が、改めて認識されざるをえない。

(一橋大学教授)